人ののりたるとなんさらに見えぬ、猶おりて見よなどわらひ給へば、ともなりつる人どもゝ興じわらふ、歌はいかにか、それきかんとのたまへば、いまおまへに御覽ぜさせてこそはなどいふほどに、雨まことにふりぬ、○中略さてまいりたれば、ありさまなどとはせ給ふ、○中略いづら歌はとはせ給ふ、かう〳〵とけいすれば、くちおしの事や、うへ人などのきかんに、いかでかおかしきなくてあらん、其きゝつらん所にて、ふとこそよまゝしか、あまりぎしき事ざめつらんぞあやしきや、こゝにてもよめ、いふがひなしなどのたまはすれば、げにと思ふにいとわびしきを、いひあはせなどするほどに、藤侍從の、ありつるうの花につけて、卯花のうすやうに、

ほとゝぎすなくねたづねに君ゆくときかばこゝろをそへも去てまし、かへしまつらんなどつぼねへすゞりとりにやれば、たゞこれしてとくいへとて、御すゞりのふたにかみなどいれてたまはせたれば、宰相のきみかき給へといふを、なをそこになどいふほどに、かきくらし雨ふりて、神もおどろ〳〵しうなりたれば、物もおぼえず、たゞおろしにおろす、○下略

〔續世繼七新枕〕この右のおとゞ○源雅定、中略殿上人におはせしとき、いはしみづのりんじのまつりの使去たまへりけるに、その宮にて、御かぐらなどはてゝ、まかりいで給けるほどに、まへのこずゑに郭公のなきけるをきゝたまひて、としよりの君の、陪從にておはしけるに、むくのかうの殿、これはきゝたまふやと侍りければ、思ひがけぬはるなければこそはへめれと、心とくこたへ給けるこそ、いとしもなき歌よみ給たらむには、はるかにまさりてきこえける、四條中納言○藤原定頼このれうによみをき給けるにやとさへおぼえて、又きゝ給ておどろかし給もいふにこそ侍りけれ、

〔後拾遺和歌集二春〕三月つごもりに、郭公のなくをきゝてよみ侍ける、　中納言定頼

郭公おもひもかけぬ春なければことしぞまたで初音きゝつる

〔源平盛衰記二〕新院御卽位同崩御附郭公幷雨禁獄事